

キラコンテンツという言葉がある。

- あるサービスやコンピュータの機種を大きく普及させるきっかけとなる、特別に人気の高いサービスや情報のこと。
- 「新しい入試」にとって「ICT (Information and Communication Technology)基盤」はそれらに当たるのか？
とは言え、……
- 「何のため」の新しい入試か？
- 「何のため」の新しい入試のICT基盤か？
- 大切なのは、「何を作るか？ではなく」、「何に使うか？である」。「誰にとって、何にとって有益なのか？」が前提とならなければならない。

周知のトロウモデルで考えてみると、

- 高等教育のマス・ユニバーサル化が実現するには、「アテンダンス(就学)」ではなく、「アクセス(機会)」のマス・ユニバーサル化が重要であり、
- それは「パーティシペーション(参加・参画)によって実現する。」

- 「ユニバーサル高等教育の出現は、学習社会化、情報社会化、と並行的にその一部として実現する。」
- 「先端科学技術の開発を中心に激しい国際競争が展開される中、先進諸国では高学歴人材の需要が急速に高まり、成人を巻き込む形で学習の生涯化が進行する。」
- それを可能にするのは、IT(インフォメーション・テクノロジー)の発達であり、学習社会化はそれによって現実のものとなる。

しかし、ここで疑問が生じる。

- 高学歴人材の社会需要の高まりに呼応して、果たして人々(学生)は学習意欲を高めるだろうか？
- 重要なのは、新しい入試やそれを可能にするICT基盤が、人々(学生)の学習意欲を高めるための役割を担えることである。

- 日頃、日常生活に特段の不満を持っていない若者たちが、高等教育に何らかの積極的価値(欲求)を認めうる工夫が必要なのであって、それは、必ずしも入学試験の世代交代による工夫を意味しない。
- むしろ、「無入試(入試なし)」を前提とする新たなインターフェースの創造と新たな高等教育ビジョンの構想がそれを後押しする可能性がある。

HIGH STAKES TEST の弱点からの転換

- こうした時代に、「新しい入試」はもちろん、それを支える「ICT基盤」の議論はどうあるべきか。
- 新しいテストの開発が、High Stakes テストの世代交代：第一世代(共通一次試験)、第二世代(センター試験)、第三世代(PISA型新テスト???)しか意味していないのであれば、時代の需要に果たして応えているとは言いがたいのではないか？

- ご存知のように、“High Stakes Test”とは、「大変なものがかかっているテスト」という意味である。一般に、テスト実施者（ユーザー）、つまり学校や大学がそのようなテストに基づいて行う学生の振り分けや、卒業資格および入学許可の判定、に利用される。
- 一方、「日々の学習診断」のためのテストは、Low Stakes Testと呼ばれる。

* high-stakes-いちかばちかの *a high-stakes contest* | のるかそるかの競争...

コロラド大学のDR. LINN等の指摘

- High Stakes Testは、その社会的意味故に、教師を学力競争に巻き込み、(テストで高得点を上げるための準備に駆り立てるために)、学生たちの実際の学力を誇張しがちである。そして、基礎技能を軽視し、カリキュラムを意図的にテスト内容に傾斜して構成する傾向が生じる。
- テストの持つ否定的な側面を回避するには、できる限り、様々な測定ツールが利用されることが求められる。学力診断はもちろん学生のパフォーマンス評価には、判断基準となる複数の指標が必要であり、複数の学習診断テストの継続的利用が有効である。

「参加」を支える学習診断型LOW STAKES TEST

- その場合、「世代の交代」でなく、「ビジョンの交代」が求められる。
- 高次の学習社会への移行を促進しようとするれば、人々の大学への参加がむしろ促進されねばならない。
- その場合、機能分化は不可欠である。知識基盤社会における高次思考技能 (Higher Order Thinking Skills) 人材の育成を担う機関と、汎用的技能 (General Purpose Skills) 人材の育成を担う機関の種別化はむしろ進行することになる。
- とはいえ、それは“Low Stakes”でこそ意味がある。

入試選抜型から参加許可の判定型への移行

- すなわち、それは「パーティシペーション (参加・参画) によって実現する。」

◎試験の種別化として見ると:

- Entrance Exam – Before Enrollment 入学許可認定型 (従来の選抜型入学の場合)
- Placement Test – After Enrollment 科目履修許可判定型 (開放制入学の場合) →アメリカのコミュニティカレッジ等でよく見られる

更に、

しかし、実際、「GPAとテストスコアだけでは、個々の学習者の適性はわからない。」という現実とどのように向き合うか？

・・・実際、大学での成功には多様な要素が含まれている。・・・

進学力 ⇒ 大学入試の準備 → 合格へ！ +++ さらに
登録 ⇒ 大学入学の準備 → 参加へ！ +++ さらに

大学で活躍する力

メタ認知の力(3):

- ・目標を意識して行動する力
- ・計画を立てる力
- ・自己観測(モニターする)力

感情を起こす力/動機付けの力(6):

- ・目標達成のために奮闘する力
- ・リスクを負う覚悟(チャレンジする姿勢)
- ・自己効力感(自分の可能性を信じること)
- ・不安力(目標が高いと、不安は高くなる!!!)
- ・粘り強さ(辛抱強く続ける姿勢)
- ・立ち直る力(回復力)

人間関係の力(3):

- ・チームワーク力(チーム内で連携できる力)
- ・協働力(目標の為に同等の立場で協力して共に働く力)
- ・寛容さ(自分とは違うものと自然体で向き合える力)

高感度 × 好感度

☆メタ認知とは？：自分の思考や行動そのものを対象として、客観的に把握し認識する力。

HIGH STAKES TEST からLOW STAKES TESTへ

- ICTを使えば、Low Stakes Test でむしろ威力を発揮するのではないか？
- 少なくとも、ICTは、教授活動に不可欠な効果的なフィードバックによって選択と決定を可能にする。
- さらに、様々なLow Stakes TestやGPA等の学習成果情報の組み合わせによる有資格者認定指標 (Eligibility Index)を導入することで、High Stakes Testの過度の弊害を調整することが可能となるのではないか？

たとえば、有資格者認定指標：
(SAT/ACT & HS RANK/ HS GPAによる ELIGIBILITY INDEX)

CCHE Admission Eligibility Index, Effective Fall 2008

		SAT																			
		400	500	550	610	690	750	800	840	880	930	970	1010	1050	1080	1120	1160	1200			
		490	540	600	680	740	790	830	870	920	980	1040	1070	1110	1150	1190	1230				
		ACT																			
		<12	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27			
% H.S. Rank	H.S. GPA																				
0-1	0-1.3	45	47	49	51	53	55	57	59	61	63	65	68	70	72	74	76	78			
2-3	1.4-1.5	49	51	53	55	57	59	61	63	65	67	69	72	74	76	78	80	82			
4	1.6	51	53	55	57	59	61	63	65	67	69	71	74	76	78	80	82	84			
5-6	1.7	52	54	56	58	60	62	64	66	68	70	72	75	77	79	81	83	85			
7-8	1.8	54	56	58	60	62	64	66	68	70	72	74	77	79	81	83	85	87			
9-10	1.9	56	58	60	62	64	66	68	70	72	74	76	79	81	83	85	87	89			
11-12	2.0	58	60	62	64	66	68	70	72	74	76	78	81	83	85	87	89	91			
13-15	2.1	60	62	64	66	68	70	72	74	76	78	80	83	85	87	89	91	93			
16-18	2.2	61	63	65	67	69	71	73	75	77	79	81	84	86	88	90	92	94			
19-22	2.3	63	65	67	69	71	73	75	77	79	81	83	86	88	90	92	94	96			
23-26	2.4	65	67	69	71	73	75	77	79	81	83	85	88	90	92	94	96	98			
27-30	2.5	67	69	71	73	75	77	79	81	83	85	87	90	92	94	96	98	100			
31-34	2.6	69	71	73	75	77	79	81	83	85	87	89	92	94	96	98	100	102			
35-38	2.7	70	72	74	76	78	80	82	84	86	88	90	93	95	97	99	101	103			

カリフォルニア州立大学(CSU)のELIGIBILITY INDEX

CSUMentor * Create An Account * Log On * Counselor & Educator Info

Search CSUMentor:

Home What is CSU Mentor? Explore Campuses Plan for College Apply Online Financial Aid Ask an Expert

Middle School students * High School students * Transfers * Graduates * International * EOP * Teaching Credentials

E-mail this page
Print this page
en español

Eligibility Index - California Residents

Admission Requirements

- Overview
- Subjects
- Grades & Tests
- HS Graduation
- Early Start Program
- International Students

Eligibility Index Table for Residents of California or Graduates of California High Schools

3.0 and above qualifies for any score

GPA	ACT Score	SAT Score	GPA	ACT Score	SAT Score	GPA	ACT Score	SAT Score
2.99	10	510	2.66	17	780	2.33	23	1040
2.98	10	520	2.65	17	780	2.32	23	1050
2.97	10	530	2.64	17	790	2.31	24	1060
2.96	11	540	2.63	17	800	2.30	24	1060
2.95	11	540	2.62	17	810	2.29	24	1070
2.94	11	550	2.61	18	820	2.28	24	1080

Eligibility Index - California Residents

- Nonresident Index
- Campuses That Have Higher Standards
- Majors That Have Higher Standards
- Residency Classification

12.10.31 © Yoshi & Associates

59

その為には、大学入試の国内外の比較を可能にする、“COMMON CORE (共通基盤)”に対する政策研究の視点別のアプローチが必要！
21世紀スキルの獲得に照らして、適切性(SUITABLENESS)が重要である。

- 1. 成果(Consequences)の適切性の視点から、
教育の成果は、来るべき社会の人材形成(教育のグローバルな接続を背景としたKnowledge-Based社会での人材像)に照らして、適切であるか。
- 2. 公正性(Fairness)の視点から、
教育およびその成果の評価、その運用は、来るべき社会の人材形成の有り様に照らして、公正であるか。

12.10.31 © Yoshi & Associates

60

- 3. 転移および一般化(Transfer and Generalization)の視点から、
獲得される知識や技能は、来るべき社会の人材形成のプラットフォーム(基盤)に成りうるか。 応用、展開の可能性。
- 4. 理解の状態(Cognitive Complexity)の視点から、
単なる記憶(暗記)でなく、来るべき社会の人材に期待される複雑な問題の分析と解決に必須の高次の思考技術(Critical Thinking など)の獲得に適切に対応しているか。
「Digital Immigrantのための」から「Digital Nativeのための」教授手法の開発

- 5. コンテンツの質(Content Quality)の視点から、
カリキュラムの構成および中身の質は、来るべき社会の人材形成に対応しているか。
- 6. 有意義性、有効性(Meaningfulness, Effectiveness)の視点から、
カリキュラム、評価および測定は、来るべき社会の人材形成に向けて有用であるか。

- 7. コストと効率性(Cost and Efficiency)の視点から、
教育およびその評価の一連の活動は、コストと効率性
で見たとき、妥当であるか。
- 8. Testingの質、信頼性(Testing Quality, Reliability)の継続的向上の
視点から、
適切なテストが、来るべき社会の人材形成を目的として、
適切に展開されるためのシステムは、適切であるか。
など。

IN SEARCH OF EXCELLENCE,





ありがとうございました。



12.10.31 © Yoshi & Associates

65

「グローバル化と大学入試 -多様性と可能性の評価が未来を創る-

田中義郎

(桜美林学園・桜美林大学総長補佐、総合研究機構長・大学院教授)

グローバル化する社会の大学入試について議論が必要である。我が国の「学力」の定義を考えれば、5教科7科目の試験で測れるもの、という思想に至る。大学入試センター試験はそのように設計されているように思う。同様に、学力を測ることを考えた場合、諸外国には様々な学力の思想がある。例えば、イギリスのAレベル試験、ドイツのアビトゥーア、アメリカのSATやACT、韓国のCSAT、どれも皆それぞれ固有の大学文化に基づいて学力を定義し、大学の入学審査を課している。これらをどのようなプラットフォームで共有できるのか、を検討しなければならない。この課題を整理すると、我が国の大学入試は何に依っているのか、何に依っていないのか、何を測っているのか、何を測っていないのか、あるいは測れていないのか、ということについても、それらを真摯に考えてみる必要に立ち至る。

グローバル化とはダイバシティ（多様化）である。人口減少社会の進む道は、人材の多様化、多様な人材の集団に変わるという道である。そこでは、コラボレーション（協力）が尊ばれ、新しい言葉では、協働とか協創という言い方もある。産業界では、業界、業種の再編成が進行し、新たな業界、業種が誕生する。

高等教育は、グローバル・マーケットとしての学生移動の基盤というモデルを新たに考える必要がある。IIE(Institute of International Education)によれば、留学生の主要受入国、2009年度の数字では、留学生総数でアメリカが67万人、イギリスが41万、ちなみに、日本は12万3,829人である。一方、留学生の主要送出国を見ると、中国が第一位、第二位はインド、そして、第三位が韓国である。ところが、日本の留学生受入実績では、第一位は中国、第二位は韓国、第三位以下のどこを見てもインドが見当たらない。我が国の高等教育はインドからの留学先選択の対象に入っていない。なぜ私たちの高等教育はインドの留学生から選択されないのか。アメリカの主要な理工系大学では、インド系学生

はマジョリティ（大多数）である。カリフォルニア州のシリコンバレー等、アメリカの科学技術産業を支えているのは、インド出身の理工学者やエンジニアの活躍である、とさえ言われる。

なぜ選ばれないのかということは、これまではほとんど研究の対象になっていないし、その理由が、大学入試に反映されているかと言えば、全くされていない。今日、グローバル化に対応できるのは、多様性と可能性に着目する多元的で横断的な成長アセスメント型の評価である。

どうやら、我が国の大学入試とアメリカのカレッジ・アドミッションは相当に違う。我々の言うアドミッションズ・オフィス(AO)入試は、日本のオリジナルである。一般に、大学入試は、セレクション、いわゆる入学者選抜の装置である。それに対してカレッジ・アドミッションは入学有資格者の評価(エリジビリティ・アセスメント)の装置である。我が国では、高校卒業は大学受験資格であるが、少なくとも現状では、大学入学の有資格認定ではない。この現実を踏まえての議論が必要である。

前提には、ダイバシティ（多様性）がある。今日、グローバル化とほぼ同等の意味を持つと私は考えているが、ダイバシティに対応しうる大学入学の基盤として新たなプラットフォームが必要となる。いわゆるカレッジ・レディネスの定義である。一見、アメリカのカレッジ・トランスファー（大学間移動）やヨーロッパのボローニャ・プロセスの話にも聞こえるが、グローバル化やダイバシティは、意欲のある学生が一定の水準を相互に保証された学びをいつでもどこでも機関や地域や国境を越えて享受できるシステムであり、そのために、大学の入学を如何にデザインするか、ということになる。

今、私たちは大学のゲートキーパーとしての入学システムの役割の変化という現実に直面している。望めば誰でも高等教育を享受できる可能性のあるオープンアクセス時代、ドアは既に皆に開かれているから、如何に彼らを大学に導くかを念頭に置いたテストや仕組みの開発がむしろ重要である。それには、彼らを後押しするもの、引き上げるものに着目して、彼らが大学生活で困難に直面しないために何が足りないのか、何を足さねばならないのかを発見し、手当ての指針となるものを用意することが必要である。

そこで、エリジビリティ・インデックス (Eligibility Index: 有資格者指標) がグローバル化の過程で活躍するのである。例えば、UCエリジビリティがある。カリフォルニア大学 (UC) のエリジビリティ・インデックスでは、高等学校の

GPAを入力し、SATの点数を入力し、ACTの点数を入力すると、まずは、第1段階としてカリフォルニア大学に入学する資格要件を満たしているかどうかの評価をインターネット上で自己診断できる。この場合、特定のキャンパスに拘らなければ、10校あるキャンパスのどこかでは学べるという現実を志願者は事前に知る。しかし、これがUCバークレーやUCLAといった国際的競争力が高く人気が集中するキャンパスを希望すると、収容力を越える希望者が集中し、最終的に厳しい選抜に直面する。いずれにせよ、カリフォルニア大学システムが期待する適正な学力はこの過程で担保される。

エリジビリティ・インデックスという考え方は、大学で学ぶ学力の水準を事前に想定し、そうした学力を如何に担保し、同時に、如何に測定するか、ということに気付かせてくれる。その場合、適正な学力の再定義が求められる。カリフォルニア大学では、SATやACTなど様々なテストの結果や高校のGPAなどの日々の学習成果の集積が学力である。トランスファーの考え方は、大学生がある高等教育機関から他の高等教育機関に移動することであり、既得履修単位が移動先の高等教育機関において同価値認定される過程である。この場合、アカデミック・プラットフォームを共有することが重要である。

グローバル化時代とは多様な価値が開花する時代で、高等教育の進学率の高まりにより、エリート選抜による排除から、学習コミュニティによる協創、コラボレーションの時代になる。大学入学試験が人生を左右する決定的な転換点になるのではなく、人生を模索する出発点となるためには、入学試験はどうあるべきか。知っているだけでなく、「～できる」を評価する。例えば、知識力の他に、実験力や推論力でも、運用力や展開力でも、評価してはどうか、等。プロフィシエンシー・アチーブメント(Pro-Achievement)型アセスメントへの転換である。

そのためには、各国の大学入試の根拠となっている学力の思想の国際比較を可能にする政策研究の視点が大切である。グローバル化時代の大学入試では、大学生が有しているはずの文化的識字力(Cultural Literacy)が国境を越えて通用する能力(Transnational Competence)として定義され、そのプラットフォームが適正に個人の中に形成されていることが入学有資格者評価のベンチマークとならねばならない。その場合、エリジビリティのマネジメントは極めて重要である。

以上。

「コモンビジョンへの道」

田中義郎

(桜美林学園・桜美林大学総長補佐、総合研究機構長・大学院教授)

繁栄への道(Pathways to Prosperity) - ハーバード大学プロジェクト

今や、学校教育の目標は、単なる学習支援や社会的人間の形成にのみあるのではない。むしろ、若者たちが如何に学校教育を活用して、豊かな職業生活への価値ある移行をできるように手助けできるか、がその目標に内包されなければならない。

わが国では、来年度（平成23年度）から完全実施される新しい学習指導要領で、これまで以上にキャリア教育の推進が求められている。

本年（2011年）2月、ハーバード大学教育大学院は、繁栄への道(Pathways to Prosperity)と題したプロジェクト報告書を発表した。副題には、「21世紀のために、アメリカの若者たちの教育目標を達成する」と書かれている。この報告書は、中等教育に始まる若者たちの近未来の職業選択と連動するカリキュラムや訓練を系統化する教育システムについて論じている。そこで、若者たちは、電気工になるか、大学教員になるか、と言うように職業に対する準備をすることができる。さらに、職業選択の準備として、あるいは、高等教育を受ける者の準備としてどのような技能が必要であるかを見つけ出そうとしている。

1980年代以降、大学に進学しない若者たちが、彼らの意気込みをくじかれるような職業に直面してきていることが報告されている。現在、より多くの職業が何かしらの高等教育を要求している。このことは、バラク・オバマ、アメリカ大統領が、高校卒業後、少なくとも1年間の高等教育をすべての若者が受けるようにと望んだこと（college for all:すべての若者たちに高等教育を）の背景でもある。1973年、10の職業の内7つの職業は、高卒で良かった。しかし、2007年、この数字は、10の職業の内4つに変わった。現状の職業（職種）の半分が今後10年間に、新たな職業に入れ替わると予測されており、それらの職業がすべて、何かしら高等教育（大学はもちろん、短大や専門学校等での訓練を含む）を要求してくることが確実である。同時に、これらの

職業はこれまでの職業よりも明らかに高収入が見込まれる。

「1983年の Nation at Risk (危機に立つ国家) 以来、若者たちが大学に進学することにのみ注目してきた。それは、良いことだったが、その中身については、限定的で、あまりにも視野が狭かったのではないかと、ジョージタウン大学教育・労働力研究所のアンソニー・カーニバル所長は言う。あまり早い時期にひとつの職業に決めない方がよい。大学入学後の当初の科目履修は、あまり職業を意識し過ぎない方がよい。すべての若者たちが、将来に役立つ高等教育での学位もしくは証明書を獲得できる道を求めることを、可能にするべきである。中等教育では、多くの若者たちが大学進学か、就職するのか、極めて限定された選択肢の中で育てられている。様々な職業で必要とされる知識や技能の間の関係は、今日、それほど大きな隔たりがあるわけではない。専門職では、むしろ、相互横断的に似通った能力が期待されることも多い。それ故、彼らの学びは、結果的に似通っており、むしろその関係の繋がりこそが重要である。

アメリカ合衆国教育長官のアン・ダンカンは、教育者や政策立案者は、必要とされるアカデミックな技能と職業技能を混合して、高等教育および高収入の職業に向けて同時に若者たちを準備すべく、職業技能教育の理想を組み入れるように求める。彼らひとり一人が高等教育と同時に職業生活での成功を思い描けるプログラムを再構築することが重要であり、どちらが欠けても望ましいものではない、と明言する。

教育問題の世界同時多発現象 - 「専門職」の定義の拡大

昨今、小中学生に将来の進路を尋ねると、高等教育機関に進学することを否定する若者たちにどの程度出会うだろうか。アメリカでは中学3年生の90%以上が高等教育機関への進学を将来計画の中に組み込んでいるというデータがある。わが国でも、大多数の若者たちにとって、高等教育への進学は既に現実的な選択肢となっている。

今や、高等教育機関への進学は、先進諸国の多くの若者たちにとって当たり前の未来になりつつある。それは、専門職に対する広義の理解と、そうした専門職の量的拡大とに深く関係している。すなわち、高等教育機関からの卒業証書を有する者に限られているすべての職業は専門職と定義されることである。

高等教育を受ける準備ができている、とは何を意味するのか。高等教育における社会経済的価値の重要性は広く認識されている。高等教育で成功を納めるために必要とされる技術と21世紀の労働市場で期待される技術は、これまで以上に密接な関係に置かれる。アメリカ連邦政府は、2009年に American Recovery and Reinvestment Act (アメリカ復興・再投資法)を可決し、すべての大学生にとって適切でかつ信頼できる質の高い評価の実現や高等教育および職業の準備としての厳格な教育水準の達成を確かなものにする法律を施行した。その過程で、高等教育の準備と職業の準備の水準は連動すべきである、と明言された。

しかし、同時に、多くの若者が高等教育に進学する状況で、大学と高校の間に大きな「溝」が存在することが知られるようになった。それが、30年前と異なるのは、この「溝」があることで若者が大学へ進めないのではなく、志願した若者の大半が大学へ入学してしまった後に、溝が発見されることである。大学進学者が少数であった時代には、この「溝」は際立つことはなかった。「溝」は制度疲労の象徴である。しかも、この現象は大学の大衆化が進んだ国であれば、どこでも見られる共通な現象という点で、今や、わが国だけでなく世界の問題である。

改めて、高校教育のゴールを再構築 -大学教育におけるスタンダードとベンチマークの共同管理の必要性

多数の意見を総合すれば、高校教育のゴールは大学入学後の準備のためだけではない、と言う。仮に、高校教育のゴールが大学進学準備だとしたら、すべての卒業生は大学に進学する準備を整えることができることにもなる。

今や、高校教育の空洞化や高校消失が憂慮される一方で、大学進学を目指す若者たちは、大学進学準備教育に高い関心を示し、そうしたプログラムに積極的である。しかし、わが国の場合、未だそれは、大学の入試準備のための教育の域を出ていないし、学生募集戦略の域を出ていない。高校教育と大学教育のスタンダード(期待される教育の標準)とベンチマーク(達成すべき教育の最低基準)の共同管理を進め、その有効性と現代中等教育の適切性の検証を行う事は、高大教育接続の新たな展開に重要なヒントをもたらす。

カレッジレディネス(College Readiness)に着目し、形成を促す

わが国の大学入学者選抜では、現在、年齢人口の半数以上が大学・短大に進学する。その中で、学力試験を経て大学に入学する者は50%台に留まり、推薦・AO入試などの非学力型選抜の割合は40%を超える。少子化のなかで受験競争の緩和に伴い、競争の弊害を問う声はむしろ後退し、いまや学生の学力低下、進学準備不足を憂う声が大きいの。多くの若者が大学教育の機会を享受できることは理想である。だが、高校も大学も共にこれほど多くの学生を送り出し、また受け入れる機関として、元来、想定されたものではなかった。大学教育のユニバーサル化を実質化するには、入学者選抜はもとより、学生のダイナミックな移動を保証する大学間連携、カリキュラムの弾力化・多様化など、高校、大学を包摂する教育システム全体の見直しが必須である。「教育システムの中で、選抜型入学試験が突出した機能を果たした時代は終わった。入学者選抜は、高校教育や大学教育を基盤として支える一つの仕掛けとならねばならない」と、2010年4月に、入学者選抜政策の未来を睨んで大学入試センター内に新設された入学者選抜研究機構の荒井克弘機構長は言う。

最近のアメリカでの高大接続研究の多くは、高校生が大学入学以前に獲得する学習技術と大学の教員が大学での学びで必須と考え、学生たちに期待する学習技術との間に大きな隔たりがあること、を明らかにしている。アメリカの大学では、Reading（読むこと）、Writing（書くこと）、Thinking（考えること）、Listening（聴くこと）、そして、Grit（不屈の精神、気概）、大学教育に対する姿勢、といった諸要素の重要性が取りあげられる。

SAT や ACT といった大学入学判定に利用される標準テストで測られる読解力は、大学での最も基本的な学習技術である。学生は、様々な専門分野に渡る膨大な資料を読むことが要求される。そして、資料と格闘し理解しかつ思考を深めなければならない。「読むこと」は、分野を問わず、大学で成功する基本的な学習技術である。しかし、読解力に優れていることは、必要条件だが、成功のための十分条件ではない。「私が知る限り、優れた大学生は、読解力のみならず、その関連する学習技術において、優れていた」と語るのは、コネチカット州マンチェスター・コミュニティ・カレッジで教鞭を取るパトリック・サリバン教授である。彼は、大学教育の準備ができていない学生は、以下の3つの条件を充たしている、と言う。

1. 読むことが好きである。(読むことが嫌いな学生は、大学で苦勞する。)
2. 高校時代の課題図書を読み終えていると同時に必読書を読み終えている。(『教養が、国をつくる(Cultural Literacy)』(1987)の著者 E. D. ハーシュの言う文化リテラシーをある程度共有している必要がある。)
3. 楽しんで読むことができる。(本を読むことを生活の一部にできない学生にとって、大学生活は苦勞の連続である。)

特に、グリット＝不屈の精神、気概の大切さを説く研究者たちは、この用語に、自己訓練、粘り強さ、熱意の意味を込める。学業の未達成者たちは、不適切な教師、つまらない教科書、大人数のクラスを避難する。しかし、研究者たちは、彼らの知的可能性を失墜させる別の理由を提示する。それは、自己訓練の失敗である。アメリカの若者たちの多くは、長期的な利益のために短期的な快楽を犠牲にできるか、という選択で困難を抱えている。自己訓練プログラムは、学業達成を成し遂げる上で、重要である。

*

今日、高等教育は予測ができないほどの無数の価値との出会いの良き契機であり、若者たちの高等教育に向かう姿勢は極めて重要である。彼らを如何に未来に導くのか。わが国も同様の課題に溢れているが、未来に続けなければならない道である。

以上。